

茸の話（四話）      = = =    三州横山話より

かわ茸のシロの嚙

かわ茸は、秋、松茸よりやや早く北向の雑木林に生えると言いますが、生えるところをシロ（代）と言って、シロ以外には生えるものではありません。それですから、代を知っているものは、自分の代を他の人には覚えられない用心に、採りに行くときは、直接シロのあるところへは行かないで、とんでもない方向違いのところから、林の中をシロのあるところへ近づいて行くのです。帰るときも同じようにして来るものです。私が子供の頃、村の弘法米という爺さんにつれられて、かわ茸を採りに行ったことがありますが、途中爺さんの話に、村のものは、北向きの山しか生えないと思っているけれど、そんなことはないものだ、自分はもう年を老って近いうちに死んでいく体だから、シロを覚えておくと言って、やがてつれて行かれたところは、南向きの暖かい山で、そこには、見事なかわ茸が、ずっとウネをなして、齒朶の中に生えていました。

この爺さんが死んでから、私はこっそり三年ほど、ここでかわ茸を採りました。

笑い茸をとった男

村のある男が、秋、かわ茸を採りに行って、カキシメジという茸に似た初茸のたくさん出ていたのを採って来て、家内中で喰べると、暫くしてから家のもの互いの顔がおかしく見えて来て、果ては口から涎を流しながら、げらげら一晚中笑い続けて、翌日は、がっかりしてしまったと言いますが、採って来た男の話に、名も知らない茸だから、最初採る気はなかったが、余り見事に出ているので、それを見ていると、急に欲しくなって、採って来たのだそうです。

毒茸のクマビラ

鳳来寺村玖老勢の丸山鉄次郎という男が、山小屋で仕事をしている時、仲間の一人が名も知らぬ茸をたくさん採って来て、明朝の汁の実にすると行って小屋の天井へ吊るしておいたのを、その男が寝ながらそれを見ると、夜目にきらきらと光って見えるので、てっきり毒茸と思って、翌日は朝早く起きて、一人で別の汁を煮て喰べて、仲間のものの寝ているうち、黙って仕事に出かけたと言います。その日は一日、残った連中が仕事に出て来ないので内心茸にあてられたなと思いながら、夕方小屋へ帰って見ると、残りの連中が、仕事着を着け

たまま、口も利けないで、蒼くなって唸っていたそうです。汁の鍋には、茸がまだたくさん残っていたと言いました。翌日になって、やっとあてられた連中も治ったそうですが、それはクマビラという大変毒のある茸だったそうです。

#### 万年茸（靈芝）の生える処

靈芝は、櫨の木の根株が腐った跡へ出るものだと言います。